

無刊記古活字版『毛詩』『春秋経伝集解』が叡山版であること  
—有刊記叡山古活字版『科註妙法蓮華経』『止観義例随釈』との  
活字・組版手法の共通性から—

上田 由紀美

\*キーワード

古活字版・叡山版・慶長日件録・組版・インテル

はじめに

古活字版の出版に関する数少ない同時代の記録の一つに舟橋秀賢の『慶長日件録』があり、比叡山に関して以下のような記事がある。<sup>1)</sup>

慶長九年二月二十九日「次比叡山僧（イ） 僧来（中略）来月中旬より毛詩之板可摺始云々」

同年三月二十八日「叡山智藏坊来訪、彼毛詩之一字板漸出来之間、近日可令摩摺云々、為校正予也点本令拜借、大本一冊是又令借与」  
同年四月六日「次叡山智藏坊来、毛詩御本摺本・同註本摺本小本一冊借遣之」

同年十二月二三日「叡山月藏坊より毛詩注本一・二之卷一冊、并小本毛詩一冊返来、則又毛詩十七・十八之卷、同小本十七・十八之卷兩冊借遣之」

同一〇年三月一〇日「叡山月藏坊来（中略）毛詩注本十五六卷并小本兩策借遣之」

同年八月二十九日「次比叡山智藏坊来入、毛詩印本六部之分惠之、次左伝之本共借与之」

同一二年一〇月六日「叡山月藏坊より毛詩注本新板十部到来」

これらの記事から、慶長九年（一六〇四）から一二年頃にかけて比叡山において「毛詩」の一字板（活字版）の出版が行われ、校正のために秀賢から点本・大本などを借り受けていたこと、また「左伝」につい

ても「毛詩」と同様に秀賢から本を借り受けていたことがわかる。

川瀬一馬氏『古活字版之研究』<sup>2)</sup>は、ここから「毛詩」および「左伝」の古活字版が比叡山において出版されたと考え、以下のように叡山版の「毛詩」と「左伝」を推定している。

清原秀賢の慶長日件録に拠れば、月蔵坊に於いて慶長十年前後に毛詩及び左伝の摺刷を行ふに当り、秀賢に種々の指導を仰いでゐる。現存の毛詩及び左伝の古活字印本中には其の刊記を有するものは見当たらないが、月蔵坊所刻の慶長十六年刊科註妙法蓮華經と同種活字の毛詩及び左伝は現存する。即ち其の版式上、月蔵坊所印と認む可きものである。<sup>3)</sup>

川瀬氏が叡山版としたのは、具体的には古活字版『毛詩』第二種（イ）（ロ）および『春秋経伝集解』第二種（イ）（ロ）（ハ）である。<sup>4)</sup>これらに比叡山の刊記があるわけではないため、川瀬氏が判断の根拠としたのは、慶長一六年に比叡山東塔東谷月蔵坊で出版された古活字版『科註妙法蓮華經』と「同種活字」が使用されていることであり、また「版式」の相似であった。

同時代の記録に乏しく、刊記が無いものも多い古活字版の出版経緯を知るには、出版された本そのものの中に手掛かりを探るしかない。活字や版式は有力な手掛かりであり、多数の古活字版を網羅的に調査された川瀬氏の判断は重く尊重される。しかし川瀬氏は「同種」という判断の

根拠を具体的には示されておらず、同等の経験を持たない後代の者がその判断をそのまま受け継ぐのは難しいという問題がある。川瀬氏の説を経験とは別の方法で検証することが求められるのである。

本稿では川瀬氏の説を裏付けるべく、この「同種活字」を欠損活字の共通性から確認することを試みた。また「版式」についても組版の手法に踏み込んで特徴を検証した。調査を行ったのは、川瀬氏が同種活字と指摘された『毛詩』第二種（ロ）、『春秋経伝集解』第二種（ハ）、慶長一六年『科註妙法蓮華經』に加え、元和二年（一六一六）比叡山西塔南谷の刊記を持つ『止観義例随釈』の四種である。（以下、単に『毛詩』、『春秋経伝集解』と記す場合は『毛詩』第二種（ロ）、『春秋経伝集解』第二種（ハ）を指す。）

## 一 書誌事項

調査を行った四種の書誌事項について、出版事項、版式に係るところを主に記す。

『毛詩』 国立国会図書館所蔵本

二〇卷 一〇冊 二六・二×一九・〇種

無刊記

四周双辺 有界 每半葉八行每行一七字 注小字双行 上下花魚尾 大黒口 版心「毛詩一（二十）」 國風（小雅、大雅、周頌、魯頌、商頌）（丁付）

匡郭内二〇・三×二六・一糶（卷一、二丁表）

『春秋経伝集解』 国立国会図書館所蔵本

三〇卷 一五冊 二六・九×一九・七糶

無刊記

四周双辺 有界 每半葉八行毎行一七字 注小字双行 上下花魚

尾 大黒口 版心「左氏序（一）三十」（丁付）

匡郭内二〇・三×二六・一糶（卷一、二丁表）

『科註妙法蓮華経』 京都大学附属図書館所蔵本

八卷 一〇冊 二九・五×二〇・二糶

刊記「于時慶長十六年十月日於延曆寺東塔東谷月藏房摺刊之畢」

（卷八卷末）

四周双辺 有界 每半葉八行毎行一七字 注小字双行 上下花魚

尾 大黒口 版心「妙科一之上（一）之下、二之上、二之下、三（八）

（丁付）」上欄天部单辺、科文

匡郭内二〇・二×二六・一糶（卷一之上、一丁表）

『止観義例随釈』 国立国会図書館所蔵本

六卷 三冊 二八・三×一九・五糶

刊記「于時元和二「丙」辰／暦仲秋上旬／於山門西塔南谷摺刊之」

（卷一 卷末）「于時元和二「丙」辰／暦孟冬下旬／於山門西塔南谷

摺之」（卷六卷末）

四周双辺 有界 每半葉八行毎行二〇字 注小字双行 上下花魚

尾 大黒口 版心「隨釋一（一）六」（丁付）

匡郭内二三・六×一五・七糶（序表）

『毛詩』『春秋経伝集解』の版式はほぼ同様であるが、『科註妙法蓮華経』

は上欄に科文があり、『止観義例随釈』は一行字数が多く匡郭の高さも

高い。しかし、いずれも四周双辺、有界、每半葉八行、上下花魚尾、大

黒口の版式は共通している。前述のとおり『毛詩』『春秋経伝集解』は

無刊記だが、『科註妙法蓮華経』には慶長一六年一〇月延曆寺東塔東谷

月藏房、『止観義例随釈』には元和二年比叡山西塔南谷の刊記がある。

## 二 欠損活字について

この四種のうち最も活字の欠損が少なく版面が整っているのは『毛詩』である。それに比べると『止観義例随釈』には磨滅や欠損がある活字が多く、版面から受ける印象はかなり異なる。しかし詳しく個々の活字を見比べると、以下のような欠損活字が共通して認められることがわかる。<sup>5)</sup>

表1に挙げたのは一例であるが、「發」は第八画の途中が欠け、最終画の払いにも凹みがある。「則」は最終画の中央やや上部に欠損があり、「立」は第四画の屈折部に小さな切れ目があるとともに最終画の中央に

【表1】

					毛詩
					春秋經伝集解
					科註妙法蓮華經
					止観義例随积

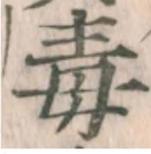
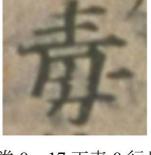
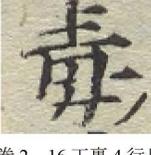
欠けがある。「顯」は第一七画の途中に小さな凹みがあり、「竟」は第六画の下部が欠けている。

活字には相似した字形のものがあり、同一活字の認定は難しい面がある。しかし別の活字が字形のみならず欠損箇所まで一致する可能性は低く、特に「發」のように特徴ある欠損が二箇所とも一致することはほぼありえないであろう。右表のような欠損活字が一つのみならず複数共通することは、この四種の活字が同じであったこと（同じ活字を含む活字セットが使われていたこと<sup>6</sup>）を意味する。川瀬氏の「同種活字」という判断を裏付け、『毛詩』『春秋經伝集解』を叡山刊行とする根拠とできると考える。

また、活字によっては欠損が進行していく様子を見ることができ、四種を通じてそれがわかる例を見つければ、例えば、表2の「毒」字を同一活字と認定してよければ、『毛詩』では最終画横棒の第六画との交差部右に切れ目があるのみだが、『春秋經伝集解』では第一画の左部が失われ、さらに『科註妙法蓮華經』『止観義例随积』では第五画の屈折部、最終画左部・中央部と欠損が進行していることがわかる。こうした欠損の進行状況は版面全体の印象とも対応しており、『毛詩』『春秋經伝集解』が『科註妙法蓮華經』（慶長一六年）よりも早く刊行されたことを窺わせる。これらを『慶長日件録』所載のものと同定して「慶長十年前後」の刊行とする推定と年代の面においても矛盾せず、川瀬氏説の傍証とすることができよう。

なお、川瀬氏が同種活字と指摘された『毛詩』『春秋經伝集解』『科註

【表2】

	毛詩
卷13 10丁表4行目	
	春秋經伝集解
卷5 9丁表7行目	
	科註妙法蓮華
卷8 17丁表8行目	
	止観義例随積
卷2 16丁裏4行目	

妙法蓮華經』はいずれも東塔東谷の月藏坊刊行と考えられるが、同じ活字が西塔南谷刊行の『止観義例随積』に用いられていることにも注意される。元和二年の『止観義例随積』は西塔の有刊記本としては最初期のものであり、その出版に東塔との繋がりが窺えることは興味深いと言える。

### 三 組版の特徴について

前述のようにこの四種は版式が相似しているが、外見上、似通っているだけではなく、組版の手法においても共通した特徴がある。以下、版面にみえるインテルの痕に注目して、その特徴を確認したい。

図1（『毛詩』巻1・16丁裏）「蔽芾」の右、図2（『春秋経伝集解』巻12・11丁裏）「八月」で始まる行の行頭から行末まで右側断続的に、図3（『科註妙法蓮華経』巻1上・23丁表）「或見菩薩」の右、図4（『止観義例随積』巻1・33丁表）刊記

【図1】

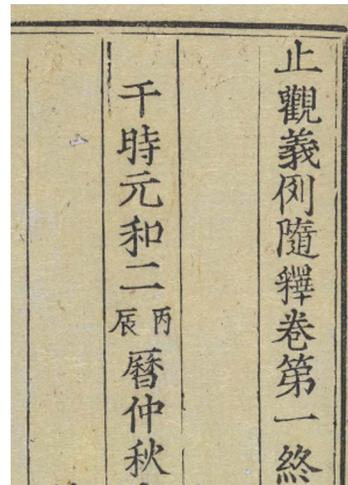


【図2】



【図3】





の行頭の空格と1字目「于」の左には、文字と界線の間インテルの痕が黒く刷り出されており、この四種には界線とインテルが併用されていることがわかる。

このような界線とインテルの併用については従来知られるところが多かったが、森上修氏は角倉素庵刊『史記』にインテル痕を見出し、「各丁の界線間に木活字駒を挟んで両側に一本ずつの細いインテル（半丁八行、一六本）を挿入している<sup>9)</sup>」ことを確認された。また慶長勅版『錦繍段』『長恨歌琵琶行』、『説文解字篆印譜』、伏見版『孔子家語』にもこうした「界内インテル」の痕が見られることを報告されている<sup>10)</sup>。

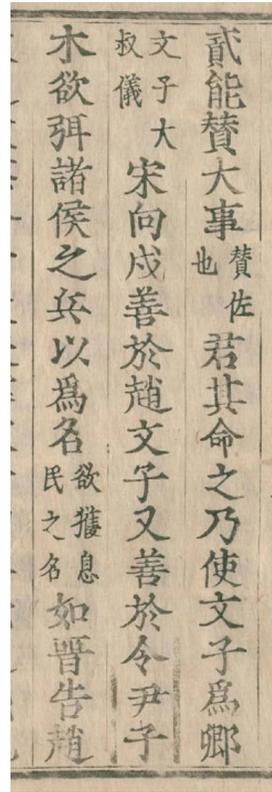
この四種もそうした「界内インテル」の例であるのだが、興味深いのは、一行単位でインテルを入れるのではなく大字と小字の箇所インテルを入れ分けている——大字箇所のみインテルを入れている——ように見られることである。



図5『止観義例随释』巻6・22丁裏 大字「漸」「頓」と左側の界線の間にはインテル痕がみえる。しかし、その下の双行の小字「簡」の左には上と同じインテルが入る余地がない。この小字箇所にはインテルが刷り出されていないのではなく、そもそも入れられていなかったと見られるのである。

小字の横にインテルを入れる余地がないこと、それは言い直せば小字二字を合わせた幅が大字一字分よりも広がったことを意味する。確かに、この箇所に限らず、この四種においては小字のほうが界線の際まで広がっており、他方、大字は左右に余白がある。図6『春秋経伝集解』巻18・19丁裏)において大字活字の幅は、「令尹子」の左右のインテル痕に挟まれた約一五耗と推定できる<sup>11)</sup>。それに対して小字二字分の幅は、同行の行

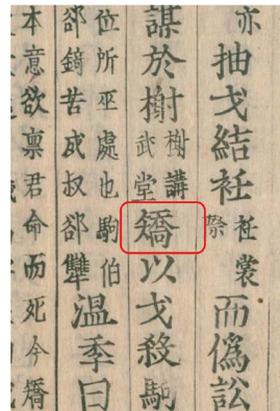
【図6】



頭の小字「文」「叔」の印字面の左端から右端までを計測しても約一八耗あることがわかる（界幅約二一耗）。

すなわち、この四種においては、小字二字を合わせた幅は大字一字分よりも広くなっており、その差を埋めるために、大字の左右にインテルを入れたと考えられるのである。ただ、これは相当に煩雑な作業だったことが想像できる。大字のみの行は一行分の長さのインテルで良いとしても、小字のある行では小字の箇所や文字数に応じて、さまざまな長さのインテルを入れなければならない。図7（『春秋経伝集解』巻13・38丁裏）四行目の「矯」のように、行の途中の大字が偏っているのは、この箇所にインテルを入れ損なつたためであろう。また、図8（『春秋経伝集解』巻23・15丁表）一行目のように、行全体が偏っているのは、大字だけの行で、小字との差を埋める必要がなく、片側のインテルを省略したためと考えられよう。

【図7】



「矯」が左に寄り、界線との余白がほとんど無い。その二字下の「戈」も左に偏る。

【図8】



行全体が右側に偏るのは、右側のインテルを省略したためと考えられる。

では何故このような煩雑な組版を敢えて行つたのか、気になるところであるが、その理由は不明である。（別々の用途に作られた大字・小字が取り合わ

された可能性も考えたが、それにしては両者の縦の寸法が揃い、磨滅の度合いにも大きな違いはないように思われる。また、こうした組版が他の叡山版においても行われていたのか、叡山版以外の古活字版においてはどうか、古活字版の組版技術史の中にどう位置づけられるのか等々、さまざまな疑問も生じてくるが、本稿においてはそれらについて論ずるだけの準備がない。十分な考察を恥ずるばかりであるが、識者のご教示を仰ぎたい。

このほか、この四種の特徴としては、版心の魚尾と界線の間隙間があることが挙げられる<sup>⑩</sup>。このことは版心の黒口・魚尾と界線が別部材の組み合わせであったことを想像させるが、『毛詩』『春秋経伝集解』『止観義例随积』については、図9、10のように同一の黒口・魚尾であっても、界線との隙間が広くなったり狭くなったりしていること、また同一の界線が異なる黒口・魚尾と組み合わせられたり、版心ではない行間に使用されていることからそれを確かめることができた。ただし『科註妙法蓮華経』については、このような箇所を見つけないことができなかったため、黒口・魚尾と界線を別部材で組み合わせるといふ組版手法が四種に共通していたかは保留としたい。だが、このような魚尾と界線の間隙間は叡山版においてしばしば見られるものであり、こうした版面上の特徴も共通していることは『毛詩』『春秋経伝集解』の版種を考える上で押さえておいて良いと思われる。

【図9】



左右両図の魚尾は、花卉の形状が相似し左辺の凹みや下線の欠損も一致するため、同一と認められるが、右図のほうが界線との隙間が広く、左図は狭い。

おわりに

以上、川瀬一馬氏の説に基づき、『毛詩』第二種（ロ）、『春秋経伝集解』第二種（ハ）が叡山版であることを検証した。刊記から叡山版であることが明らかな慶長一六年『科註妙法蓮華経』（延暦寺東塔東谷月蔵房刊）、

【図10】



左右両図の魚尾の花卉の形状や黒口内の白い模様状の傷が一致するため、両者の魚尾・黒口は同一と認められるが、右図のほうが界線との隙間が狭く、左図は広い。

元和二年『止観義例随釈』（比叡山西塔南谷刊）と同じ欠損活字が使用されていること、また共通した組版の手法がとられていることは、刊記の無いこれらもまた叡山版であることを客観的に示す根拠とできると考  
える。<sup>15)</sup>

なお、川瀬氏が叡山版と推定されたうち『毛詩』第二種（イ）には、これらと同じ欠損活字や組版の手法は認められない。<sup>16)</sup> 叡山版と判断する根拠はなく別種と考えるべきと思われる。『春秋経伝集解』第二種（イ）（ロ）については未調査だが、これらと同じ欠損活字や組版の手法が認められるかが叡山版か否かの判断の手掛かりとなろう。

このたびの調査では川瀬氏説の検証を行うとともに、慶長年間に比叡山東塔東谷月蔵坊で使用された活字が元和二年西塔南谷刊行の『止観義例随釈』にも用いられていたこと、また、この活字を用いた組版が大字の箇所のみインテルを入れ、小字箇所には入れないという手法であったことにも気が付くことができた。こうした細かな版面調査ができたのは近年普及したデジタル画像の恩恵によるところが大きい。原資料調査の必要性や重要性が失われるものではないが、デジタル画像が調査の可能性を広げていることは間違いないであろう。本稿は叡山版数点について欠損活字や組版の特徴を形状面から考察したものに過ぎず疎漏も多いと思われるが、古活字版の研究の進展に少しでも寄与できるところがあれば幸いである。

〔注〕

- (1) 『史料纂集』「第一九」第一、二 続群書類従完成会、一九八一年一月、一九九六年六月
- (2) 川瀬一馬『古活字版之研究』安田文庫、一九三七年。増補版は日本古書籍商協会、一九六七年。
- (3) 注2 三〇九頁
- (4) 注2 三七四〜三七六頁
- (5) 国立国会図書館所蔵『毛詩』と『止観義例随釈』に共通する欠損活字が認められることは、「国立国会図書館月報」六八七／六八八号（二〇一八年七月／八月）において報告した。
- (6) 活字の差し替えや増補等は当然あったものと思われる。
- (7) 『止観義例随釈』には元和二年版と同じ西塔南谷の刊記を持ち、版式も一致する寛永十一年（一六三四）古活字版がある（身延山大学所蔵）が、これは活字が異なり、後述のようなインテル痕は見受けられず、版心の魚尾と界線も一体となっている。
- (8) 長澤規矩也『叡山活字板』について（『書誌学』復刊六号一九六六年一月）は元和三年『涅槃経疏』（東塔）、『守護国界章』（西塔北谷正観院）、同四年『心地教行決疑』（西塔南尾）の三書を第一種C活字に、元和四年『真言宗教時問答』（東塔無動寺）、寛永三年『天台法華宗学生式問答』（西塔宝幢院）の二書を第一種D活字に分類しており、東塔、西塔で同種の活字を使用した例が他にもあったことが推測される。なお長澤氏は元和二年『止観義例随釈』

「積」を「第六種活字」に分類し「この活字使用の経書の古活字印本、例へば孟子がある」とされるが、該当する『孟子』の所在は未確認である。

(9) 森上修「〈嵯峨本〉以前の古活字版について」(森洋久編『角倉一族とその時代』思文閣出版、二〇一五年七月)

(10) 注9および森上修「古活字版印刷と木活字駒の彫出技法」(藤本幸夫編『書物・印刷・本屋―日中韓をめぐる本の文化史』勉誠出版、二〇二一年六月)

(11) 大字活字の大きさを知る上では、『春秋経伝集解』巻二の二丁表二行目下部の込め物の痕や、卦を表す活字(巻26の17丁裏など)も参考となると思われる。

(12) 『毛詩』と『春秋経伝集解』の黒口・魚尾は形や大きさが同様で襲用もあると見られるが、『科註妙法蓮華経』と『止観義例随釈』はそれぞれ魚尾・黒口の大きさや形状が異なり、同じものが使われているわけではない。しかしいずれも版心の黒口・魚尾と界線の間に隙間があることは共通している。なお『止観義例随釈』以外の三種は黒口と魚尾が印面上で分離しているが、常に同じ組み合わせで用いられていることから、黒口と魚尾は同一の部材に彫り込まれていると判断した。

(13) 例えば、『春秋経伝集解』巻二〇の七丁表と同二四丁表の版心の界線は上から五〜六字目に当たる箇所と同じ形状の欠損があり同一のものと考えられるが、組み合わせられている魚尾は形状や欠損箇

所が異なる。また、これと同じ界線は同巻二一の四丁裏四〜五行目の間にも使用されており、版心だけではなく行間にも使用されていたことがわかる。

(14) 『毛詩』第二種(ロ)が京都大学附属図書館清家文庫中に含まれる(請求記号1163/モ/5貴)ことも『慶長日件録』との関連を考えた上で示唆深く思われる。

(15) わかりやすい版面上の相違点としては、これら四種は版心の界線と魚尾の間に隙間があるのに対して、『毛詩』第二種(イ)では版心の界線と魚尾が一体となっていることが挙げられる。

[図版] 掲載図版は以下のデータベースの画像を使用した。

『毛詩』(国立国会図書館所蔵 請求記号WA71254)

国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/>)

DOI 巻一 10.11501/2569977 巻一〇 10.11501/2569981

巻一一 10.11501/2569982 巻一三 10.11501/2569983

巻一六 10.11501/2569984 巻一九・二〇 10.11501/2569986

『春秋経伝集解』(国立国会図書館所蔵 請求記号WA7149)

国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/>)

DOI 序 10.11501/2543903 巻五 10.11501/2543905

巻一一 10.11501/2543908 巻一三 10.11501/2543909

巻一八 10.11501/2543911 巻二三 10.11501/2543914

巻二六 10.11501/2543915

『科註妙法蓮華経』（京都大学附属図書館所蔵 谷村文庫

請求記号 1-23 / カ / 1 貴）

京都大学貴重資料デジタルアーカイブ

(<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/>)

『止観義例随釈』（国立国会図書館所蔵 請求記号 WA7-290）

国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/>)

DOI 巻一・一 10.11501/11446356 巻三 10.11501/11446357

巻五・六 10.11501/11446358

〔附記〕 本稿執筆に当たっては、高木浩明氏、大沼宜規氏よりご助言いただきました。また高木氏を通じて森上修氏よりご教示いただきました。記して厚く感謝申し上げます。

